

# 日本人は

## 集団主義か

谷口浩司

二度のオイル・ショックが与えた世界経済不況のなかで、日本の自動車を始めとする工業製品の輸出増大は、いわゆる貿易摩擦を引き起し、欧米の先進諸国の経済により一層の深刻な影響を与えている。日本経済の成長と安定をもたらした要因は、停滞する欧米にとって非難の対象になるとともに、他方で危機打開のための秘訣がそこにあるかのように関心を引き起している。そのことがまた、我が国において、一種の開き直りにも通じかねない自信といったようなムードを逆に創り出すことになっている。

さて以上のような時代背景をもちながら、ここ数年、日本人論や日本文化論の流行から日本的経営論や日本型福祉論の台頭にみられるように、「日本的」なるものへの関心がずいぶんと高まってきている。それらに共通して取り上げられている「日本的」特徴の一つ

に「集団主義」なる用語がある。それは、輸出で問題となっている自動車産業などで典型的に見られるものなのだが、生産性向上へ向けて、QCサークルやZD運動などを通して、労働者が一丸となって働いている姿が描かれている。しかし、それが果して集団主義と呼ぶようなものだろうか、と近年私は考えるようになっていく。

確かに欧米の個人主義的伝統に比して、日本において、単に企業活動だけでなく政党のあり方や世界的に見て稀だといわれている町内会組織、果ては海外旅行に出かける農協に至るまで、それらの現象が「集団好き」の日本の精神風土、といったようなものを感じさせなくもない。だが少し立ち止ってもう一歩踏み込んでみると、そこには器としての集団はあっても中味となる集団は影が薄い、すなわち、それは団体としての会社や政党や町内会や農協があるのであって集団としてのそれには程遠い。もしそれを表現するなら、団体主義と呼べるようなものになるのではないか。そこでは、個人は器である団体に身を委ね、押し黙り、そして社会階層を登る階段を一段でも上へと鎗を削<sup>しご</sup>ってはいはしないか。もしそうだとするなら、その姿は利己主義的で

あり、その意味でむしろ個人主義的でさえあるように私には思える。実態が会社主義であり、町内会主義であり、農協主義であるものに集団主義の名を与えることは、現実を正しく理解していくことにはならず、逆にさえないかねないのである。

そもそも集団は個人が集まったものであり、それは個人の自我と表裏を成している。個人が自らを高めていく勇気を与えられることに集団の力が作用する、そのことこそが集団主義の名に値するといえるのではないだろうか。してみると、集団に個人が埋没しがちな日本が、まさにそのことによって当面勝利しているように見えても、本当の成功に至るにはまだ少し道程があるように私には思えてくる。

注 QCとはQuality Control(品質管理)、ZDとはZero Defect(無欠点)のことで、共に職場での小集団活動をいう。

(たにぐち ひろし 社会学部助教授)